

立場が変わると何が見える



～その8 家庭、里親、児童養護施設の体験から～

坂口 伊都

はじめに

また新年が明け、年度終わりに近づいてくると、慌ただしさを感じます。元旦から大きな地震に見舞われ、身近に衝撃的な事柄も起きました。その中で明るい気持ちになるのが憚れると感じながら、それでも、人は生きていく営みを続けていくしかなく、寝て、起きて、仕事して、ご飯作って、犬の散歩をしています。自分自身でも気持ちの底に何があるのがよくつかめませんが、大きな震災を幾つも経て、コロナウイルスの感染を経験し、前に進もうとする気持ちを学んだような気がします。自分達の力ではどうしようもできない大きな力を前にし、できることをしていこうとする力でしょうか。皆さんは、どのようなことを感じていますか。

私事ですが、12月に銀婚式を迎えました。

結婚して25年。なかなかの年月です。頑張ったなあ私達。

私は、結婚記念日を何故か正確に覚えられず、この辺りの日にちだったという程度の認識で、祝うこともせず過ごしていました。去年の結婚記念日に突然、大学生の娘がレストランを予約して祝ってくれました。その宴席で、次が銀婚式になると気づきました。そこで、夫と相談して来年は娘を招いて祝おうと決めました。自分たちのために祝う気は起きませんが、娘が絡んでくると途端にやる気が出ます。夫が、魚介と肉の鉄板焼きの店を夫が予約してくれました。息子も誘いましたが、仕事で来られず、残念。

前回のマガジンで紹介しましたが、夫とのやり取りの変化も影響をしていると感じます。夫婦のコミュニケーションが円滑の方向に傾くことで、結婚記念日を祝うことに抵抗がなくなりました。一緒にいてもすぐに険悪になると思えば、わざわざ時間とお金をかけてする意味を感じることはできませんが、お互いに少しのやさしさを持ち合わすことができます。

娘からは生花を夫からはネックレスをもらいました。父母から



娘に少し早いクリスマスプレゼント、私から夫には遠近両用メガネをプレゼントしました。何年か前まで、結婚記念日はいつの間にか終わっているものでしたが、娘のおかげで銀婚式を祝えました。さらに娘から提案があり、二人の結婚記念日を大切に、これからもお祝いしよう。そして父母に小さなメッセージカードを渡し、相手のいいところを書いて娘に出すように指示されました。次の結婚記念日に娘からそれぞれに渡すからねと。次は息子も一緒に美味しい料理を食べられるように動いてみるとうまうま。

さて、今回は母親、里母、そして少しの間ですが児童養護施設に関わる時間をいただけたので、それらの経験を通して見えたことを語りたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。

誰との関係が優先されるのか

子どもは誰も、生まれてすぐ育ててくれる大人の存在が必要です。自分では動けないのですから、養育者は命をかけた関係作りになります。そして、だんだんと周りに目を向けられるようになり、友達を作っていきます。年を重ねると親よりも友達関係を優先させようとうまうま。それは自然なことですが、育っていく過程の中で最終的な宿り木として親や養育者を自分の味方として捉えられているかは、人や社会を信じることにつながり、重要です。

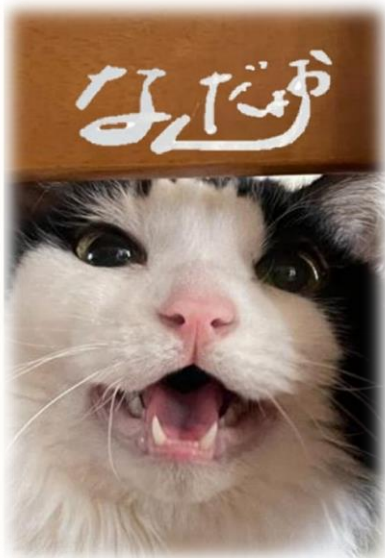
私の子ども時代の経験では、幼稚園時代と小学校、中学に通う中で子ども同士の関係を作った後、良好に維持していく方法がよくわからずに過ごしていました。楽しく過ごせることもあります。クラスの中で誰が力を持っていて、その周りにはいる子、集団でやってきて自分たちのやり方に従わせようとしてきたり、存在を否定されたかのように相手にされなかったり、強いと思っていた子が何故か泣かされていたり、いろいろな事が目まぐるしく展開されていきました。子どもだった私は、何を目標として行動すればいいのかわからず、人の関係の渦に飲み込まれていました。私は、友人との関係を持て余していましたが、大人に相談するという事は思いつかず、時代背景もあったかと思いますが、学校を休むという発想も持っていなかったです。学校が楽しい場所でもないが、母親がいる家に居るよりも学校に行っている方がマシかなと思っていました。母は、自宅の一階で居酒屋をしていたので、二階で一人の時にいろいろ妄想をして、その世界で過ごすことが楽しかった変な子どもでした。

息子は誰に似たのか、友達付き合いが下手だなあと思って見ていました。娘は、男女問わず上手く付き合っていました。本人は些細なことで悩んでいました。私から見れば、とても上手に友達と上手く付き合っているように見えますが、当の本人はそれを認めません。それは、大学生になった今でも続いていて、人間関係で凹むと電話をかけてきます。淡々と話を聞き、「そうなんだね」と返している時はいいのですが、少し意見を交えると「そんなこと今は聞きたくない」と言って叱られ、電話を切られてしまいます。私はサウンドバックかと突っ込みたくなりますが、娘には深刻な問題なのです。電話から数日が経ち娘の気持ちが落ち着くと、母子の意見交換会が始まります。そのタイミングを計るのは難しい。どんな子どもでも、子ども関係の悩みを持つものなのです。

息子の方は、小学校低学年ぐらいまで親に甘えていましたが、だんだんと語らなくなっていきました。聞いても生返事ばかりで、その上、学校からのお便りを失くしたり、ランドセルを公園に置き忘れたり、高校受験の受験受付の前日にいると言い出して慌てて高校まで願書を取りに行くこともありました。今も息子は、偉そうなことを言いますが、困ったら親を頼ってきています。兄妹でも、タイプが違うなあと感じます。

里子は、我が家に来てから、帰宅後に何をしたらいいかわからず、時間を持て余していました。施設で過ごしていた時は、子どもが至る所にいたので、気持ちが紛れる部分があったのでしょうか。里兄は高校生、里姉は中学生で自分のことに忙しくしていて、里子は狭い家の中で一人、何をしても手持ち無沙汰のようでした。里親が近くにいても、実習生のように遊び相手になるわけでもなく、里子から話しかけてくることもあまりなく、一から関係をコツコツと作っていく毎日でした。住居環境が変わり、家での過ごし方から困っていたのでしょうか。

児童養護施設の子供達は、大人との関係よりも先に施設内の子ども関係が展開されていました。ユニットケアとなり、一つのホームの子どもの数は小さくなっていますが、子どもの交流はホームを超えて交流します。子供達は、大人の目が届かないところで繰り広げられるパワー争いや自分の居場所確保が続き、さぞ神経を研ぎ澄ませているのだらうと感じます。職員は住み込みでなければ、それぞれの家に帰っていきます。子供達は、その場所で生活しているのですから、子ども関係の中での自分の居場所確保は、何よりも優先される事柄だと容易に推測できます。年齢が低いほど、自我を通そうと必死になり、年齢が高くなると陰湿さも含まれ、仲良くしていたかと思えば、衝突し、トラブルが多発します。グループの輪の中にいる時は強気な声をあげ、グループからはみ出した時は他の声に怯える。そして、誰も強者であり続けられない不安定なヒエラルキーに見えます。



児童養護施設で、夜中にある女の子の横にいることがありました。その子との面識はありましたが、お互いよく知らない者同士でした。その子が他の子どもとのトラブルで、家に帰りたく泣き、女性に話を聞いてもらいたいと言っていると、その場にいた私に白羽の矢があたりました。その子は、トラブルの内容や家に帰りたく想いを話しますが、私を見ているわけではなく、ただうんうんと話を聞いてくれるモノとして、そばに置いておきたかったようです。きっと、朝が来たら誰に話していたか覚えていないのだらうなあと思いつつ聞いていました。何故、女性なのだらう。母親的なものを

を求めているのか……。それもよくわかりません。

ただ、他の子どもが見ていない、聞いていない時にしか大人に気を許せないのだとわかりました。子どもが眠る時間、職員体制はもっとも手薄になります。子どもの関係から離れられる時間の短さを改めて感じました。

子どもにも個人差がありますが、コミュニケーションに苦手意識を感じているとも多い。子ども間のトラブルがあった時に大人を信頼して利用できるようになるには、小学校低学年頃までに親や近くの大人とどのように扱われたかで左右されるのではないかと感じます。その対象が両親であることが望ましいですが、子どもとの距離感が近いほど冷静になれなくなるものです。アタッチメントシステムの考え方では、主たる養育者が子どもの安心、安全基地になることを求めますが、養育者ではない大人の方が冷静でいられ、子どもへの状態を言葉にする寄り添いをしていけばいいのではないかと感じ始めています。

※アタッチメントシステム

人間がもつ本能で、不安等のネガティブな状態に陥ると特定の養育者に近づき、気持ちを落ち着かせてもらおうとくっつきに行く。そこで、養育者が子どもの気持ちに寄り添い落ち着かせてもらおうと、探索行動に向かう。その繰り返しを経ていくことで、安定したアタッチメントが形成されていく。

自分の中で何が起きているのか教えてよ

振り返ると、乳児院や児童養護施設で暮らす子どもや発達や知的の課題を抱える子ども等、数多くの子どもに出会う機会に恵まれてきました。幼児が大きな声で泣きわめく場面によく出会いますが、その子どもと調子を合わせて「あー、嫌やった、ここにいたくないねえ、ごめんごめん」「〇〇ちゃんは、これしたいね。でも□□ちゃんはこっちのゲームをしたいんだって、困ったね、どうしようか」等、子どもの状況を言葉にして伝えていくと、急に子どもが驚いたような顔をし、私の顔をじっと見てきます。その表情が出ると、パニック状態に進んでいくことはなくなります。この人、何言っているの？と驚いた時から私の声が届くようになります。すぐにピタッと泣き止むわけではありませんが、また思い出しては泣き、だんだんと落ち着いてきて、私の方をチラッと見てくるようになります。そうしたら、にっこり微笑むと子どもも嬉しそうな顔をしてくれます。

子どもは、自分のもやもやした感情を第三者に言葉にしてもらい、わかってもらえてスッキリしたという気持ちでいるようです。

子どもの状態を代弁するためには、冷静に観察をし、細かい部分の行動を見逃さないことがポイントになります。その場面に意識を集中させれば、代弁は上手くできます。だから、集中した方がいい時に観察ができれば、面白いほど簡単に子どもが反応してくれます。

しかし、生活を共にしている大人がそれをするのは難しい。なぜなら、生活に切れ目などないからです。どの場面で意識を集中すればいいかわかりません。子どもが不安になった時が観察する時ですが、機嫌が悪くなると、大人は動揺しうんざりします。大人の状態が不安定な時は、観察より自分の感情が優先され、集中して子どもを観察することが難しくなるのです。

里子を家に迎えた時、冷静に対応できるように、いつもよりも子どもを観察しようと努力したことがありました。その時、娘に「ママが保育士さんになっちゃった」と言われました。家の中の空気を悪くしな

いようにするための努力でしたが、母親はネジが3本ぐらい抜けているような状態の方が、親しみやすいようです。

児童養護施設の職員間で、アタッチメントの重要性を解けば解くほど、「アタッチメントアレルギー」になっていると聞いたことがあります。アタッチメントは子どもにとって大事なことはわかるが、子ども集団を前にどうしたらいいのよ、というところがあるのだと思います。

アタッチメントシステムは、個別の関係性の中に成り立ちます。同じ子どもでも、AさんとBさん相手では、アタッチメントの形が変わると言われています。その場に複数の人がいても、個別の対応をしていくことは可能ですし、そこを大切にしてくださいと伝えているのですが、複数の大人や子どもがその場において会話を聞かれている状況では、落ち着いて対応しにくいものです。その子の気持ちに寄り添った声かけをしようとしたら、

「私の時はダメと言ったのに、何でAちゃんの時だけいいの？不公平だ！」
と言われかねません。状況が違おうでしょうと説明しても、そこは入らないで、不公平やひいきしたが一人歩きしてしまいます。

児童養護施設では、子どもとの個別の場面を作っていこうとすることにも努力が必要になります。朝起きて登校して、帰ってきたら施設の子ども達と過ごし、夕食に入浴を済ませて、就寝時間まで子ども同士の関係があり、担当と二人で過ごす時間を持つという流れにはなりにくい。病気やけがをして通院や何かトラブルがあって担当と話し合うというような特別感が出てきます。

最初にも述べましたが、子ども同士の関係、子どもと職員の関係、職員同士の関係、そしてその関係の中もどれぐらい長くその施設にいるのか、さらに子どもの年齢や特徴などが絡まってきて、複雑になります。施設は、その中でのみ通る文化や価値観が存在し、まるで違う小国家が成り立っているように感じました。例えば、子どもが職員に相談をしたいと思っても皆の前で悪態をつく方が優先されれば、その対象となった職員は傷つきます。そんな事に慣れたと思っても、面と向かって悪態をつかれた後に優しい気持ちになれないことは起きるでしょう。

家庭でも里親でも、生活を共にしていくことは変わりありません。その状況の中で、できるだけ子どもを否定しないようにや、子どもの好きなものに気を紛らわせようとしないように気をつけようとしても、大人の気持ちが落ち着かず、子どもへの対応を失敗することがあります。大人側にも、気持ちを落ち着かせてもらう誰かの存在が必要です。

子どもに上手く寄り添える言葉をかけられるのは、生活を共にしていない大人の方です。

子どもは、感情を理解して生まれているわけではありません。自分の状態を大人に言葉で表現してもらおうと、自分の中で何が起きているのかわかってきます。

里子に言われたことがあります、「寂しいって、何？」と。

そう言われて何て答えたらいいのか思いつかず、固まってしまいました。この子は、寂しいという言葉
を共有せずに過ごしてきたのかと感じました。小さい頃から意識して、子どもの状態を言葉にしていく
積み重ねの重さを痛感しました。

幼児が集まるとすぐにトラブルになります。幼児の言い分は稚拙なものですから、意味もわからず言
い合っていたり、手や足が出たりします。幼児の発話量は爆発的に増え、言葉を交わせるようになると、
その言葉の意味をわかって使っているように見えてきます。だから、ついつい大人は、

「何でそんなことをするの？前にも言ったでしょ」

「そんなことをするから、皆から嫌われるんだよ」

と説教をしてしまう。子どもの中には、ダメ出しされたことだけが伝わり、行動が悪化します。発達障
がいの子どもの「ダメ」と言われることに過剰に反応すると聞くことが割とあります。これも自分が拒否
された部分が強調されて伝わるからではないかと感じます。

保育士実習で、2歳児の担当となった学生が真剣な顔をして、

「子どもが言うことを聞いてくれない」

「私を馬鹿にしているんですよ」

「どうしたら、言うことを聞かせられますか？」

と聞かれました。

切羽詰まったお母さんみたいだと感じながら、まず学生へのねぎらいから始めます。2歳児がどこま
でわかって行動していると思うか、落ち着いて振り返っていきました。子ども達を目の前にすると余裕
がなくなり、できない自分が辛くなるのですね。また、子どもの波に飛び込んでいく実習生を案じなが
らその場を後にしました。幼児は、見た目よりも未熟な存在であることをお忘れなく。

子育ての難しさ

家庭や施設の子育てを体験して、それぞれに違いはありますが、子育ての難しさを痛感しました。親も
里親も職員も子どもと良好な関係を築きたいと願っています。子どもも養育者に愛されたいと思いつ
つ、その方法がわからず反抗的な態度を取ってしまい、その態度に大人は腹が立ち、傷つき、正面から
子どもと向き合うことが怖くなる。大人も子どもも同じようなことを願っているのに悪循環に向かっ
てしまう。

家庭内は、主たる養育者が孤立していくことで、児童養護施設は関係性が複雑になっていくことで悪
化してしまう印象を持ちます。養育者は、子どもの嬉しそうな笑顔を見たいだけなのですが、悪循環に
陥るとそういう空気になりません。養育者側の状態を落ち着かせるためには、大人同士の支えあい必

要不可欠だと感じます。

家庭なら父母、里父里母のタックが組めていることが一番ですが、それがなかなか簡単ではありません。父母で相談できる関係で、話し合う時間があり、向いている方向が同じだと感じられると安心できますが、生活の中で改まって話すことはできそうで、できないのが現実なのかもしれません。

児童養護施設では、ホームの中での職員同士がタックを組むことが一番でしょう。一つのホームに複数職員が配置されますが、早出、日勤、遅出、宿直等の勤務体系があり、一緒にホームに入れるのはせいぜい 2 人ぐらいなものです。職員は、出勤した時はホームでの生活を体感できますが、離れていた時に起きたことは体感した職員と温度差が生まれます。職員は、ホームでの生活を細切れに体感する難しい経験をしています。業務内容が、介護や作業であれば公私の区別がつきやすいですが、子どもの生活を支える業務は、公私の感覚が混じり込むようでした。切り替えがとても難しい仕事だと思います。

職員同士で取り上げられる話題はトラブル対応が先に立ち、一人ひとりの子どもに向き合う余裕は持ちにくいと思います。子どものことを生活の中で、職員同士が相談してもその数人で方針を決められるものでもありません。

家庭でも施設でも、子育ての歩調を合わせるの簡単ではないのです。

- ① 子どもは見た目ほどわかっていないと考える
- ② 子どもの状態を言葉にして伝えていく
- ③ 子どもを落ち着かせることを優先する

この 3 つを覚えておくことをお勧めします。

誰もが子どもの幸せを願っているのですから、お互いに笑顔で過ごせる時間を増やしたいですね。

